

地震時に命を守る避難行動

大きな地震を何度も経験したわが国では、「地震時の心得」が、さまざまな標語として伝わっています。しかし、それらはほんとうに正しいのでしょうか。いろいろな意見をもとに、新しい防災の標語を考えてみましょう。

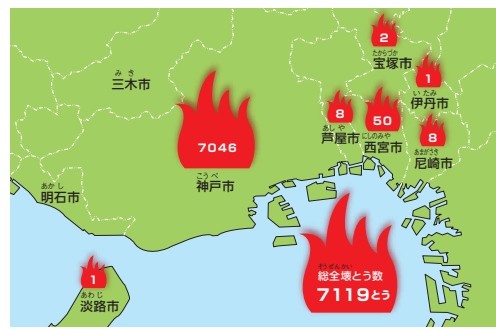


「グラツときたら 火の始末」



(写真提供 国立科学博物館)

昼食ときに地震が起こった関東大震災では、数万人が火事でなくなったわ。阪神・淡路大震災では、神戸を中心にたくさんの方の火事があったわよ。



はわないと動けないようなとき、台所で火の始末をしようと動くことなんてできるのかしら。

震度	人の体感・屋内の状況
5弱	大半の人がきょうふを感じ、物につかまりたいと感じる
5強	たなにある食器類などで落ちる物が多くなる
6弱	立っていることが困難になる
6強	はわないと動くことができない、飛ばされることもある

気象庁「地震の揺れと状況」

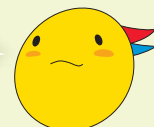


今は、震度5弱程度で都市ガスは自動的に止まるようになっている。プロパンガスも地震などのときは、安全装置がガスを止めてくれる。電気が復旧するときに起こる「通電火災」というのもあるらしいね。



熱をもったままストーブが転ぶと、ガスは止まっても危ないんじゃないかな。

地震時の火の始末はいつすればいいかな？



「あわてて外に飛び出さない」「身をかくして頭を保護する」



1981（昭和56）年に建築基準法が見直され、地震に強い建物の建設が進んだ。阪神・淡路大震災でも新設計の住宅はほとんどひ害を受けなかったそうだよ。

頭を守るものが近くにない場合、動き回るほうが危ない気がするわ。

ゆれているときの行動とけがをした人の割合

〈ゆれているときの行動〉	〈けがをした人〉
家具を支えた	約 10%
避難しようとした	約 40%
静止していた	約 2%



じょうぶな家に住んでいても、家具が不安定だと危ないんじゃないかな。



下の標語があてはまるるとき、あてはまらないときは、どんなときか考えてみよう。

- ① 「おはしも」（おさない、はしらない、しゃべらない、もどらない）
- ② 「窓やとびらを開けて出口の確保」

地震防災研究を踏まえた避難行動等に関する作業部会報告書(平成22年5月31日)を参考に作成

津波てんでんこ

「てんでん」は、「めいめい」とか「各自」という意味で、「津波てんでんこ」とは、「津波のときは、一人一人がてんでんばらばらになって、少しでも早く高いところにげなさい」という三陸地方に伝えられる心得だそうです。津波のい力や速さは、わたしたちの想像をはるかにこえています。三陸地方は、何度も津波に苦しめられました。「津波てんでんこ」とは、自分の身は自分で守るという決意だけでなく、津波のとき、そばにはいない家族や友人の行動を信じ、そのためにふだんから最善の備えをしておくという、三陸地方の人々の強い思いが感じられる心得ではないでしょうか。

読んでみよう

